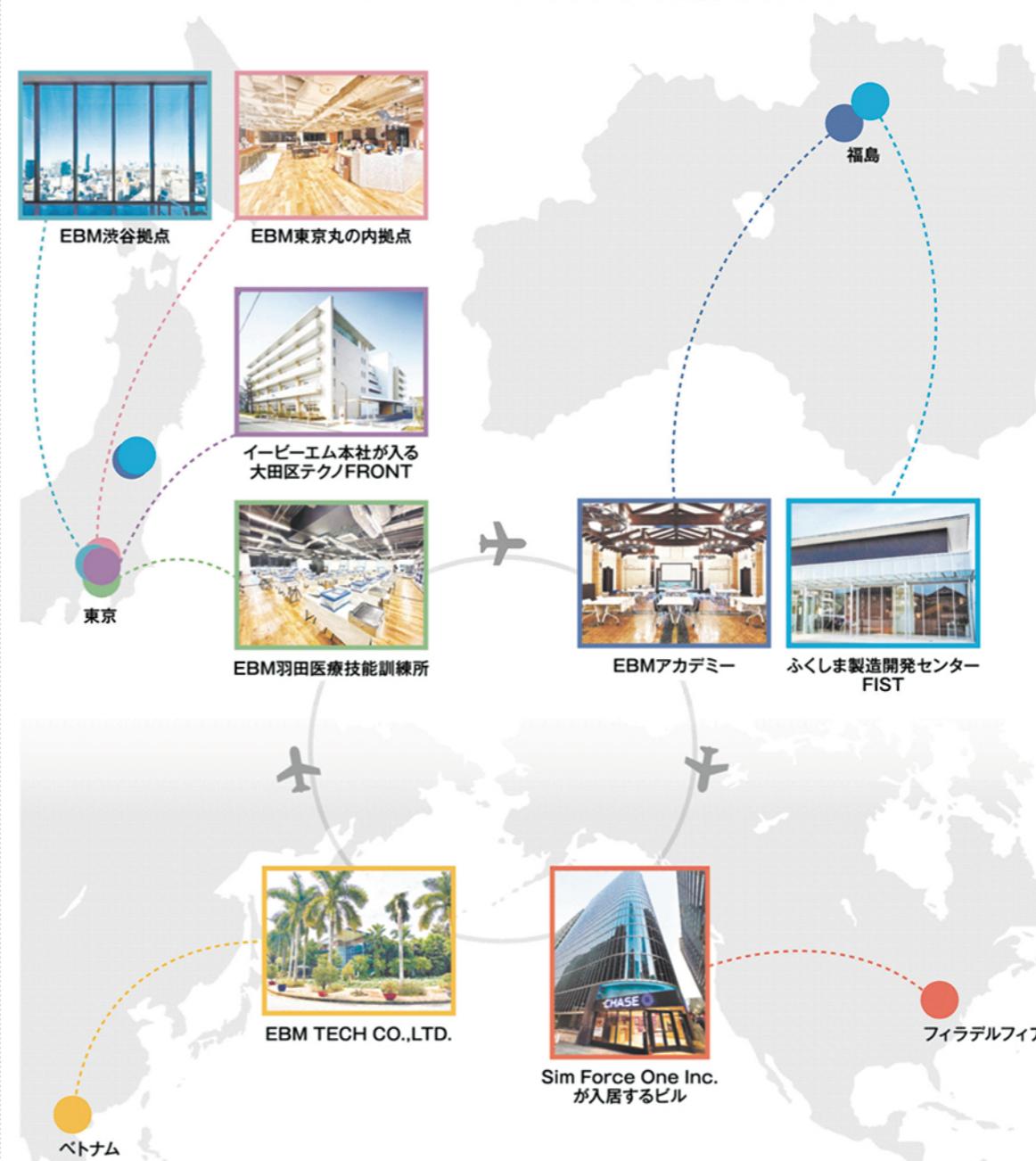


世界展開へ拠点拡大

米国 ベトナム 東京 福島

イービーエム各地の拠点施設



イービーエム創業までの歩み



少年期や学生時代の思い出を振り返る朴社長

イービーエム創業者の朴栄光（ばく・よんがん）は1981（昭和56）年12月10日、東京都月島に生まれた。学生ベンチャーとして起業するまでの歩みを、自身が振り返る形で紹介する。

幼稚園の頃から工作と実験を好んだ。小学1年生の時の将来の夢を語る会で「白衣を着て、人の役に立つけたい」と発言した。同級生からは「それでは、活きないと思います！」と強く反論されたが、これに対して「お金が足りなくなったら、そこのコンビで働きながら暮らさない」と反論された。しかし、その写真は体で花火を纏結しておくことなどができた状態だった。一発打ち込まれると、誘爆し、後ろからもロケット花火が飛んでいた。その後は、浅草橋の花火問屋

で口ケット花火を万本単位で販売し、溶接用の耐火装備を整えさせられた。夏合宿でロケーション撮影を行なった。それが本当にできることだと実感した。決め手は、立芝浦工業大学中学高等学校に進学した。決め手は、ハイテクに溢れていたからだ。しかし、その写真は体外に運んでいた。部活は、入学後に知った。理科部に所属した。スライ

ムから始まり、金属のメッキやNECのPC8801のBASICプログラミングなど、さまざまな技術に触れた秋葉原のジャンク屋に入りし、動くかどうかわからないPCをはじめの小遣いで買ったのは、「ゴミをわざわざ買ってきて」と親から文句を言われることがしばしばあつた。中学生の夏合宿は強烈で、高校生の夏合宿は、先輩が2階建バスをチャーターした。プラウン管の馬鹿でかいテレビを持ち込み、移動中もボンバーマンなどのスーパー・アーチードゲー

ができた状態だった。一方で、花火を万本単位で購入し、溶接用の耐火装備を購入するまでいた。

1990年代、ITといふ言葉も聞かれず、インターネットなどは、1分单位で電話代がかかる代物だった時代。深夜23時から朝8時まで特定番号に電話がかけ放題になるテレホーダイ

ーが必須であり、友人宅に集まっていた夜のサバーバーを拾い集め、それを修理して売っている人がいた。

ヨウTubeで動画を

アップする人までいた。

いた。その後秋葉原で店

で「おもしろい」と言われた吉野

家有楽町店、夜は近くのマ

クドナルドで深夜まで働いていた。貧乏性からか50単位も

余計に計180単位を取得

していた。飲み会も、部活

もアルバイトも全力でや

りたい、当時できたばかり

の学生派遣に登録した。田

本一忙しいと言われた吉野

は、高校3年次に東京都留学

生派遣事業において合格

SNSがない時代では「知らぬが仮」とばかりに、皆

がのびのびチャレンジする

ことができた。

高校3年次に東京都留学

生派遣事業において合格

雑誌もあり、試行錯誤する

中で仕組みを知ることで

でもあった。さまざまな製品の改造方法に関する技術

SNSがない時代では「知らぬが仮」とばかりに、皆

がのびのびチャレンジする

ことができた。

高校3年次に東京都留学

生派遣事業において合格

SNSがない時代では「知らぬが仮」とばかりに、皆

がのびのびチャレンジする

ことができた。

高校3